
印刷の価値を伝えるための表現研究

Research on Expression to convey the Value of Printing

■ 北園 大和 Yamato KITAZONO

愛知県立芸術大学大学院 佐藤直木研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：印刷、グラフィックデザイン、価値

はじめに

印刷技術は情報を効率的に伝達する目的で発明され、長い間グラフィックデザインの中心として発展してきた。しかしながら、近年新しい技術として広まっているオンスクリーンメディアの利便性から、印刷物が持つ本来の価値が見えづらくなっている。

本研究は、印刷の価値を新たな文脈で再構成し、発信することで、媒体が交錯してゆく未来での印刷のあり方を考えるきっかけをつくることを目的とする。

1. 先行研究

本研究における先行研究として、学部卒の卒業制作にて「PRINTING LAB.」という展示のデザインを制作した。

1.1. 卒業制作概要

「PRINTING LAB.」では、アナログ印刷の中でも、活版印刷をピックアップして研究を行った(図1)。活版印刷の表現方法の多様性を模索し、その結果を展示という形でプレゼンすることで、価値を伝えようとした。活版印刷が今もなお進化し続け、新しい技法を生み出していることを伝えるべく、さまざまな実験を行い、そのプロセスや実際の印刷型などを展示した。具体的な制作物は以下のようなものである。

- ・活版印刷の魅力を伝えるにあたって、さまざまな実験を行い、一連の印刷見本表としてまとめた(図2)。紙や色の見本帳と同様に、表現の見本として、アイデアの出发点として観察するアイテム。
- ・活版印刷の実験で得た表現をもとに、デザインとして機能させるためにはどのように展開すれば効果的なのか思考した。活版印刷と相性の良いシーンを想像し、活用するアイデアを提案する。生活の中の活版印刷グッズのボックス、日本の和な印象を伝える日本酒のラベル、活版印刷のぬくもりを表現できるカードの3方向でデザインした。

1.2. 卒業制作における評価・課題

約1週間の展示期間の中で、来場者に対してプレゼンを行い、感想を聞く中で、卒業制作における課題が見えてきた。以下が、その内容である。

- ・最終的な印刷物があくまでプロトタイプであるため、クリエイティビティを誘発する効果は得られない。
- ・活版印刷見本表のグラフィックをあくまで見本と捉え、可能な限り要素を削ぎ落としたことが裏目に出たため、視覚的なインパクトがなくなってしまった。



図1 卒業制作の展示物

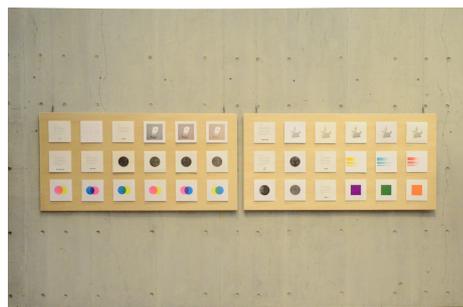


図2 活版印刷の印刷標本

2. 研究概要

本研究の最終成果物は、印刷物の価値を周知できるアイテムのデザインである。印刷物を使用したグラフィックデザインが発生するような、あるいはクリエイターの創作意欲を促進するようなアイテムの制作を目標とする。

アイテムがきっかけとなり、クリエイターが印刷技術を用いた制作を行うことで、印刷技術そのものの価値を伝えることに繋がると考えられるのである。

また本研究のターゲットは、印刷物に興味を持っているが手を出せずにいる人、つまり美大生や若手アーティストなどに設定する。若い世代に印刷物によるクリエイションを波及させることによって、将来的な持続に繋がると考えられるためだ。

2.1. 「GRAPHIC TRIAL」

印刷物の価値を周知できるアイテムとは、どのようなものなのかを考察する際に、参考となる印刷物関連の活動として凸版印刷株式会社主催の GRAPHIC TRIAL(図3)という企画がある。この企画は、グラフィックデザインと印刷表現の関係を追求し、新しい表現を獲得するための試みである。

企画内容としては、第一線で活躍するクリエイターがポスター制作(図4)を通してさまざまな印刷表現に挑戦する、というものだ。クリエイターたちは凸版印刷株式会社の印刷オペレーターと協力して、制作に挑むがそのプロセスが展示にまとめられていたり、実験途中の紙面が展示されていたりする。鑑賞者がより印刷技術に興味を湧くようなコンテンツが数多く用意されているのである。GRAPHIC TRIAL は印刷物の価値を周知できる媒体として効果的であり、話題性、クオリティともに高い、印刷界の一大イベントであるといえる。



図3 GRAPHIC TRIAL 2019の様子



図4 展示作品の一部

2.2. 印刷物の価値を周知できるアイテム

本研究では、GRAPHIC TRIAL を参考に構想した印刷物の価値を周知できるアイテムとして「複数の印刷技法を組み合わせた印刷見本帳」を想定している。

印刷見本帳とは紙とインキの適正を判断する際や、その印刷会社の持つ印刷技術を確認する際に、クリエイターに提示するアイテムである。そのため、風景などの写真や単調なグラフィック、必要な情報が淡々と記されたもの(図5)が主流であり、独自性やデザイン性のないものが多い。このことから、クリエイターの創作意欲を促進する強い魅力が存在しないと考えられる。一方で、クリエイターと印刷会社をつなぐ重要な役割を担っている側面も持っている。印刷とクリエイターの間で存在しながら、創作意欲の向上につながっていない現状があるのだ。

また、印刷物には複数の印刷技法を組み合わせた作品が少なく、一般的ではないという課題がある。普段からグラフィックデザインに携わっている者以外は、印刷の掛け合わせが可能であることも知らない。印刷技法を選択し一つの技法で完結させるという固定概念により、印刷を掛け合わせるという工夫が、選択肢にないということが起こっていると考えられるのだ。

以上のことから、従来の印刷見本帳に作品性と技法の組み合わせを足した「複数の印刷技法を組み合わせた印刷見本帳」は、新たな価値を持つ見本帳となり、印刷物の価値を周知できるアイテムと言えるだろう。



図5 一般的な印刷見本

3. リサーチ

現段階では、卒業制作時の活版印刷の資料に加え、本研究で扱うオフセット印刷、シルクスクリーン印刷、リソグラフ印刷についてのリサーチを行なった。主に書籍、インターネット、展示の見学などを利用したリサーチである。

内容としては、4種の印刷技術それぞれの特徴、適正について、また印刷の組み合わせ方やデータの制作法などである。また、過去の実験的な印刷の取り組みや、現在可能な表現についてのリサーチも行なった。リサーチの結果、4種類の印刷技術にはそれぞれに異なった特徴があり、また表現にも大きな差があることがわかる。これらの特徴を効果的に用いた印刷の掛け合わせ表現ができれば、クリエイターの創作意欲を促進できるのではないだろうか。

3.1. オフセット印刷

オフセット印刷(図6)とは、シアン・マゼンタ・イエロー・ブラックの版を出力する印刷である。1枚の紙に4つの色を刷り重ねていくことで平面を再現する。現在、最も主流の印刷法であり、短時間で再現度の高い印刷を大量に行うことができる。

また、大量に印刷することで単価を抑えられるため、大部数の印刷物に適している。さらに、多くの種類の紙に印刷可能であるため、幅広い用途に用いることができる。一般的なチラシ、ポスターは主にオフセット印刷で刷られている。

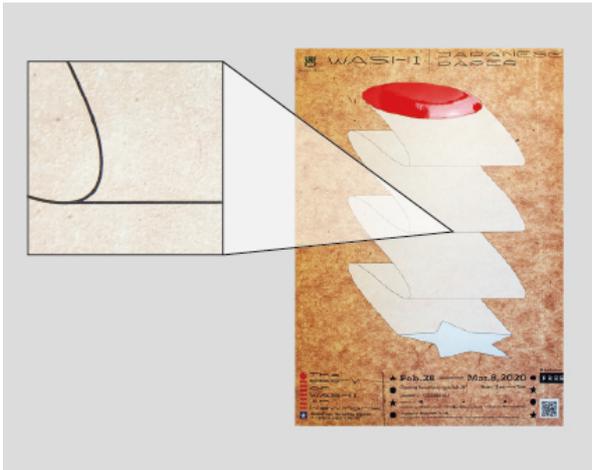


図6 オフセット印刷の例

3.2. 活版印刷

活版印刷(図7)は樹脂や亜鉛で作った版にインキを盛り、紙に押し当て印刷するという技術だ。刷り上がった印刷物は紙面上に版の押し跡が残る。この押し跡は、圧力によって印刷する技法だからこそ表れる特徴である。また、その押し跡は紙の持っている凹凸に影響を受ける。その影響は、紙面にかすれとして表れ、紙の表面の凹凸が大きければ大きいほど、強く発現する。

活版印刷は先にも述べたように、グラフィックデータに加えて圧力による凹凸、紙の表情、印刷面のテクスチャ、という多くの情報が加わるため、温もりを感じる印刷法として人気がある。

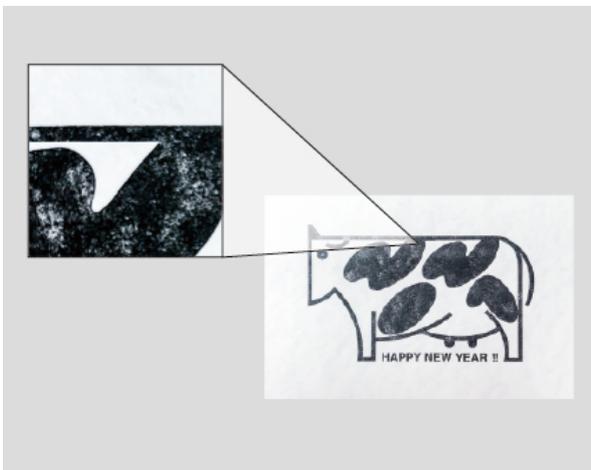


図7 活版印刷の例

3.3. シルクスクリーン印刷

シルクスクリーン印刷(図8)は孔版印刷の一種で、シルク製の版にインキを落として印刷する印刷技術である。インキと刷り方の性質から、どんなものにも印刷することができる特徴がある。

基本的にはシアン・マゼンタ・イエロー・ブラックという4色の版をつくり刷り重ねてゆくが、版を洗えば何色でも刷ることができるため、調色した色を用いることもできる。また、紙との相性が重要であり、和紙や洋紙を使用する場合もある。オフセット印刷以前はシルクスクリーン印刷が主流であったため、古い印刷物はこの技術によって刷られているものが多い。

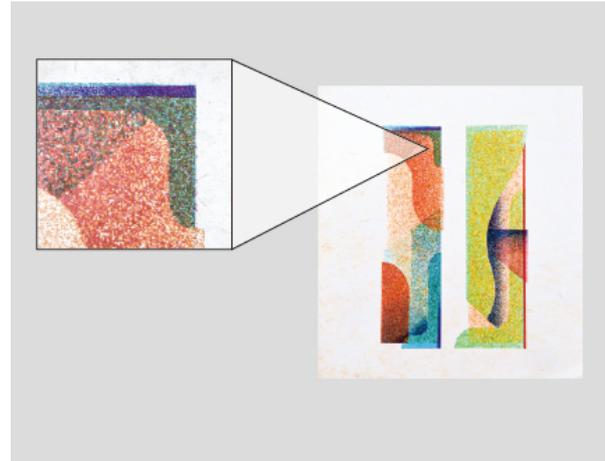


図8シルクスクリーン印刷の例

3.4. リソグラフィ印刷

リソグラフィ印刷(図9)は、孔版印刷のデジタル印刷である。版画に似ており、温かみのある表現を得意とする。1色ごとに印刷するため、版ズレを起こし、ラフな印象の刷り上がりとなる。半水性のインキのため、完全には定着せず、触れてしまうと色がうつることもある。

また、インキの性質から高彩度の色彩を持ち、そのインキの重なりによって見えてくる新たな色彩に温かみがあるとして、ZINE やカード類に多く使用される。大部数を刷るには、耐久度の関係から、版の作り直しを行う必要がある。

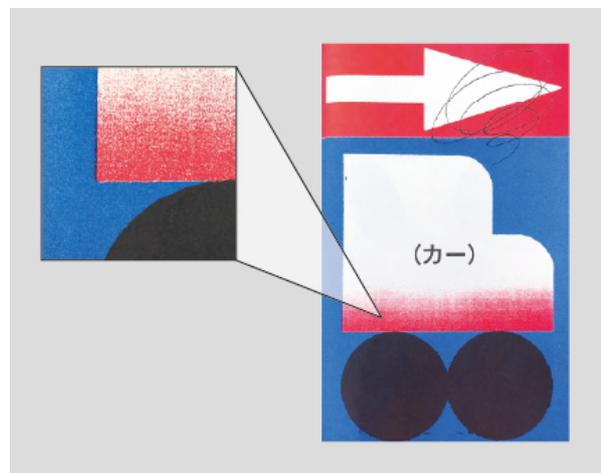


図9 リソグラフィ印刷の例[注1]

4. 印刷見本帳

印刷見本帳(図10)は、本研究で扱う4種の印刷方法を軸に検討する。4種の印刷方法全てで出力可能であり、色面的な認識も容易な A3サイズとする。A3 サイズに出力した印刷技法の掛け合わせによるグラフィックの上に、その印刷の詳細な情報を記載する。内容としては、4種の印刷法をそれぞれ対応させた、6通りのグラフィックを3種類、計18枚の構成を検討している。製本に関しても、一枚一枚手にとって見ることができるよう、バラで収納する予定である。

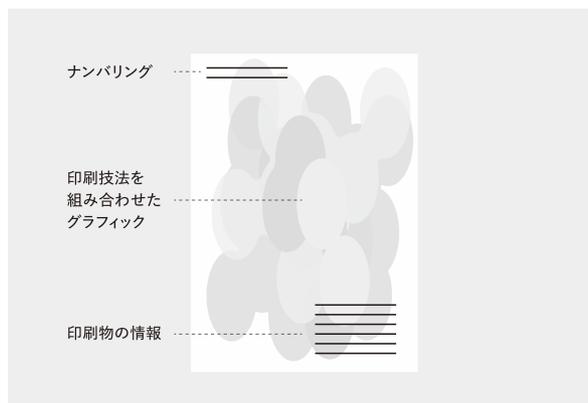


図10 印刷見本帳案

5. 制作中のグラフィック

現在、印刷法との相性を考慮したグラフィックデータ(図11)を制作している。2種類の印刷を重ねていく方法を用いる想定である。下図のグラフィックのコンセプトは花とし、インキが層になる様子と花卉が重なって咲く植物のイメージを重ねた表現をしている。



図11 制作中のグラフィックデータ

6. 今後の展開

主に印刷所への訪問、取材を軸に進める方針である。

また、表現の研究として、複数の印刷技法を組み合わせたグラフィックの実験を行う。実験段階では、予定している2種の印刷技法の組み合わせだけでなく、印刷技法4種の組み合わせなども検討し、効果的な結果を得られれば、見本帳をアップデートさせ、より豊富なバリエーションで展開させる方針である。

注、引用

1) SHUN SASAKI、「SUPER DUPER PAPER DRIVER」、AYOND、2020年、3p

参考文献

- ・パピエラボ、『紙と活版印刷とデザインのこと』、ピエ・ブックス、2010年
- ・石引パブリック、「リソグラフ印刷について」<<https://ishipub-printing.com/>> (2021/10/18 アクセス)
- ・Hand Saw Press、「RISO PRINT」<<https://handsawpresstokyo.com/riso-print.html>> (2021/10/18 アクセス)
- ・株式会社ショウエイ、「WORK'S」、<<https://www.shoei-site.com/works/>> (2021/10/18 アクセス)